琉球大学学術リポジトリ

安藤由美教授の人と業績

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学人文社会学部 公開日: 2023-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 規之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002019817

人間科学　第43号　抜刷　2023年3月　ISSN 1343-4896

安藤由美教授の人と業績

鈴木　規之

安藤由美教授の人と業績

鈴木　規之
Noriyuki SUZUKI

Professor Yoshimi Ando’s Profile and Academic Accomplishments

人と業績

長年本学で教鞭をとってこられた安藤由美教授が 2023（令和 5）年 3 月 31 日付けをもって定年退職される。

安藤由美教授は 1958（昭和 33）年 2 月東京生まれ、1990（平成 2）年 3 月に早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程を単位取得満期退学後、同 10 月 1 日付で琉球大学法文学部社会学科講師に採用された。1991（平成 3）年 10 月に助教授、1999（平成 11）年 4 月に琉球大学法文学部教授に昇任され、通算 34 年 6 か月にわたり、本学の教育、研究、大学行政に携わってこられた。その間、1997（平成 9）年からは琉球大学大学院人文社会科学研究科の授業担当教員、2000（平成 12）年 4 月以降は、同研究指導担当教員となり、大学院生の指導も担当された。

学内行政では、法文学部において、2012（平成 24）および 2013（平成 25）年度に副学部長として、進路指導委員長ならびに学生生活委員長を務め、2016（平成 28）～ 2017（平成 29）年度には新学部設置のための 5 専攻ワーキング委員として尽力した。そして、2018（平成 30）年 4 月には法文学部から改組・新設された人文社会学部の評議員を務め、翌 2019（平成 31・令和元）年 4 月から 2024（令和 5）年 3 月まで、人文社会学部長ならびに大学院人文社会科学研究科長を連続 2 期務められた。

学部では、「社会学原論」や「社会調査法」などの基礎的科目に加えて、「家族

社会学」、「ライフコースの社会学」などの専門科目を講じ、また「社会学演習」、「卒業論文」では卒論の研究指導を担当した。大学院博士前期課程では、「家族社会学特論」、「家族社会学演習」を講じ、「人間科学特別演習」で修論指導を担当された。

安藤教授の専門分野は、社会学のなかでも、特にライフコース研究である。ライフコース研究は、主に日本の家族社会学者によって、1980 年代に米国より取り入れられた、個人の一生を分析する研究分野であり、安藤教授は、大学院時代の指導教授がその先駆者の一人であった縁で、大学院時代から一貫してライフコース調査研究に専念してこられた。本学に赴任してからは、沖縄においてライフコース研究に着手し、1994（平成 6）～ 1996（平成 8）年に科研費の助成を受けて統計調査ならびに質的インタビューを、社会学実習の授業もかねて学生たちと一緒に行った。これは、沖縄で行われた初めてのライフコース調査であった。その成果は、『激動の沖縄を生きた人々』(1998 年) ほか、いくつかの論文にまとめられた。

安藤教授の、もう一つの重要な研究分野は家族であり、特に、戦後日本ならびに沖縄の家族変容を意識や行動の側面から実証的に明らかにする調査研究に数々従事された。まず、日本家族社会学会が公共利用可能なミクロ（個票）データの構築を企図して日本で初めて行った全国家族調査（NFRJ98）に参画し、高齢期介護のパートを担当した。続いて、同学会が 2001（平成 13）年に実施した全国調査「戦後日本の家族の歩み」（NFRJ-S01）では、調査の企画・実施からデータセットの構築まで深くかかわった。一方、沖縄県内では北中城村、浦添市、那覇市などを調査地として、やはり社会調査実習を兼ねた調査研究を行っており、その結果は紀要論文に発表された。

2003（平成 15）年には、法文学部の教員とともに、沖縄在住の日系人、外国人、アメラジアンの人びとホスト社会沖縄との関係性の解明を目指す調査研究を科研費助成による調査を実施し、３年間の研究期間のうち、初年度の研究代表者を務めた（２年目以降は、在外研究のため交代）。さらに、この調

査結果をふまえて、2005（平成 17）年 11 月に、沖縄在住の日系人、外国人、アメラジアンの方々と一緒に、ホスト社会沖縄との関係性を解明し、その改善に向けた議論をおこなうことを目的としたシンポジウムとワークショップを 2 日間にわたって開催し、その責任者を務めた。その模様は、『沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン』（2007 年）として、文科省科研費研究成果公開促進費事業の助成により刊行された。

安藤教授は、沖縄の社会調査データの構築にも貢献された。その一つが、沖縄総合社会調査 2006 で、教授は当時の法文学部社会学講座のスタッフ全員で取り組んだ科研費調査プロジェクトで陣頭指揮をとった。これは、前述の全国家族調査や米国の General Social Survey（GSS）、日本版総合的社会調査（JGSS）をモデルとし、沖縄版のミクロデータセットを構築しようとする試みであり、沖縄本島中南部地域住民を対象とした標本調査である。データセットは、現在、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター（SSJDA）に寄託され、公共の財産となっている。また、この調査結果を分析した『沖縄の社会構造と意識』（2012 年）は、一般財団法人九州大学出版会の出版助成を受賞した。

このほか、安藤教授は、2007（平成 19）年から 2009（平成 21）年にかけて、大阪市立大学（当時）の谷富夫教授を代表とする、沖縄の過剰都市化調査研究に研究分担者として加わり、那覇都市圏 7 市町住民を対象とした量的調査の企画運営を担当した。この調査は、本土生活を経験した沖縄出身者（いわゆるＵターン者）に対する、初めての無作為抽出標本調査であった。この調査結果を含む、プロジェクト全体の研究結果は、『持続と変容の沖縄社会』（2014 年）で発表された。

このように、安藤教授の研究はライフコース研究から始まって家族研究、沖縄ディアスポラ調査、沖縄総合社会調査、過剰都市化調査への参画と多岐にわたっている。綿密な調査による精緻な分析には専門とする社会学の学会でも定評があり、以下の日本社会学会の役職につながっている。

学会活動では、日本社会学会において、2015（平成 27）年から 2018（平成 30）年まで機関誌『社会学評論』編集委員を務めたほか、2021（令和 3）年からは研究活動担当理事を務めている。

学外では、安藤教授は、北中城村史執筆委員、名護市史執筆委員を務めたほか、沖縄県立看護大学研究倫理審査委員、沖縄研究奨励賞審査委員を歴任された。また、沖縄国際大学、沖縄大学、沖縄県立看護大学、放送大学、四国学院大学、大阪市立大学で非常勤講師を務められた。

筆者が安藤教授と初めて仕事をしたと言えるのは、1996 年に日本社会学会大会が琉球大学で開催された時であった。安藤教授（当時助教授）は事務局長として大会委員長の与那国暹教授を補佐し、日本社会学会のメンバーや大学院生も少ない地方国立大学の琉球大学での学会大会を見事に成功に導いた。筆者は当時は他学科に所属しており、安藤事務局長を支える立場であったが、安藤教授の事務処理能力や調整力には頭が下がるばかりであった。

その後筆者は学科を移り、1999 年 4 月から安藤教授と 2 人で社会学コースの卒業論文指導を担当した。安藤教授は学生の関心や問題意識を育てながら、研究課題に対してきちんと説明がなされているか、論理的整合性はあるのかという視点で指導され、とくに学生のテーマが多様化する中「社会学とは何か」「社会学的方法とは何か」という点に重きをおかれていた。その指導方針は卒業論文中間発表会などでいかんなく発揮された。

今となっては信じられないことだが若い頃の安藤教授は「自分は瞬間湯沸し器」と自認されていた、そしてソフトな口調と声質のため学生を睡魔に導くことのないよう苦心されたとうかがっている。しかし、中間発表会などでの時としての厳しい口調は、優しさの中にも厳しさを感じさせるものであった。

大学行政においても安藤教授の事務処理能力、調整力はコース、専攻（講座）、学科、学部委員会等のあらゆる場で発揮された。ともすれば自己主張の強い研究者の組織において、冷静沈着な安藤教授の存在は唯一無二のなく

てはならないものであった。

人文社会学部に改組後、評議員(副学部長)、学部長を務められたのも自然の成り行きであった。大学での学部の自治が難しくなる中、学部長就任にあたって「誰かがやらなければならない」とおっしゃられていたのが印象に残っている。そして学部長就任後も、コロナ禍での舵取りの難しい中でスムーズな学部運営が行われたことは安藤教授にして為せる業であったと言えるだろう。

安藤教授は退職後も、琉球大学人文社会学部において非常勤講師を務める予定になっている。研究についても、これまでのご自身の研究をさらに発展させていくご意向とうかがっている。

安藤教授のこれまでの琉球大学や学会活動、社会活動へのご貢献に深く感謝するとともに、今後のご健康とご活躍を心よりお祈りしたい。

安藤由美教授の略歴および主要著作目録

＜学　歴＞

1977（昭和 52）年 4 月　早稲田大学第一文学部入学

1982（昭和 57）年 3 月　早稲田大学第一文学部社会学専攻卒業

1984（昭和 59）年 3 月　早稲田大学大学院文学研究科博士前期課程（社会学専攻）修了（文学修士）

1990（平成 2）年 3 月　早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程（社会学専攻）単位取得満期退学

＜職　歴＞（専任）

1990（平成 2）年 10 月　琉球大学法文学部社会学科講師

1991（平成 3）年 10 月　琉球大学法文学部社会学科助教授

1997（平成 9）年 4 月　琉球大学大学院人文社会科学研究科科目担当

1999（平成 11）年 4 月　琉球大学法文学部人間科学科教授

2000（平成 12）年 4 月　琉球大学大学院人文社会科学研究科研究指導担当

2003（平成 15）年 4 月　琉球大学移民研究センター併任（2008（平成 20）年 3 月まで）

2004（平成 16）年 4 月　琉球大学法文学部人間科学科長（2005（平成 17）年 3 月まで）

2012（平成 24）年 4 月　琉球大学法文学部副学部長（2014（平成26）年3月まで）

2016（平成 28）年 4 月　琉球大学法文学部人間科学科長（2017（平成 29）年 3 月まで）

2018（平成 30）年 4 月　琉球大学評議員（2019（平成 31）年 3 月まで）

2018（平成 30）年 4 月　琉球大学人文社会学部副学部長（2019（平成 31）年 3 月まで）

2019（平成 31）年 4 月　琉球大学人文社会学部長（2023（令和 5 年）3 月まで）

2023（令和 5 年）3 月　定年により退職

＜職　歴＞（非常勤等）

1989（平成元）年 4 月　東京都立北多摩看護専門学校非常勤講師（社会学）（1990（平成 2）年 9 月まで）

1992（平成 4）年 4 月　沖縄国際大学文学部非常勤講師（社会学研究法）（2002（平成 14）年 3 月まで）

1994（平成 6）年 8 月　放送大学非常勤講師（家族社会学）（1995（平成 7）年 3 月まで）

1999（平成 11）年 4 月　沖縄県立看護大学非常勤講師（社会学、家族社会学）（2017（平成 29）年 3 月まで）

2000（平成 12）年 4 月　沖縄大学人文学部非常勤講師（社会調査法）（2007（平成 19）年 3 月まで）

2000（平成 12）年 4 月　四国学院大学非常勤講師（応用社会学特講 A）（2000（平成 12）年 9 月まで）

2003（平成 15）年 4 月　小渕国際交流基金フェローシップ事業ハワイ東西センター客員研究員（2004（平成 16）年 3 月まで）

2003（平成 15）年 4 月　放送大学非常勤講師（現代社会におけるライフコース）（2007（平成 19）年 3 月まで）

2008（平成 20）年 9 月　大阪市立大学非常勤講師（社会調査法および社会学特殊問題研究Ｖ）（2009（平成 21）年 3 月まで）2007 専門社会調査士

＜表　彰　等＞

2010（平成 22）年 11 月　平成 22 年度琉球大学永年勤続者表彰

2011（平成 23）年 6 月　第 2 回九州大学出版会・学術図書刊行助成

＜学　会　等＞

1984（昭和 59）年 4 月　日本社会学会会員（現在に至る）

1984（昭和 59）年 4 月　家族問題研究学会会員（現在に至る）

1990（平成 2）年 4 月　早稲田社会学会会員（現在に至る）

1991（平成 3）年 7 月　日本家族社会学会会員（現在に至る）

1997（平成 9）年 5 月　西日本社会学会会員（現在に至る）

2002（平成 14）年 5 月　西日本社会学会評議員（2003（平成 15）年まで）

2012（平成 24）年 12 月 西日本社会学会理事（大会担当）

2015（平成 27）年 12 月 日本社会学会編集委員（2018（平成 30）年 9 月まで）

2021（令和 3）年 11 月　日本社会学会理事（現在に至る）

2022（令和 4）年 9 月　日本家族社会学会監事（現在に至る）

＜学　外　委　員　等＞

平成 3（1991）年 5 月　北中城村史執筆委員（1996（平成 8）年 3 月まで）

平成 18（2006）年 4 月　沖縄県立看護大学研究倫理審査委員（2020（令和 2 年）3 月まで）

2013（平成 25）年　名護市史執筆委員（2015（平成 27）年まで）

2013（平成 25）年 10 月 財団法人沖縄平和祈念堂沖縄研究奨励賞審査委員（現在に至る）

＜主　要　著　作　目　録＞

（著書）

1990 年 11 月　『昭和期を生きた人びと：ライフコース』（分担執筆）　早稲田大学人間総合研究センター

1998 年 11 月　『激動の沖縄を生きた人びと：ライフコースのコーホート分析』　早稲田大学人間総合研究センター

2000 年 5 月　『新世紀の家族さがし―おもしろ家族論』（分担執筆）　学文社

2003 年 3 月　『現代社会におけるライフコース』　放送大学振興協会

2007 年 7 月　『沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン』(共編)　クバプロ

2010 年 11 月　『「若者と親」の社会学―未婚期の自立を考える』(分担執筆)　青土社

2012 年 4 月　『沖縄の社会構造と意識』(共編著)　九州大学出版会

2014 年 5 月　『持続と変容の沖縄社会』(共編著)　ミネルヴァ書房

（論文）

1985 年 3 月　「家族変動とライフコース・パースペクティブ―グレン・H・エルダー Jr. の挑戦」,『社会学年誌』(26), 早稲田社会学会 , 157-174 頁

1986 年 11 月　「最近の家族社会学研究の動向―ライフコース・アプローチ」(分担執筆),『判例タイムズ』(616), 22-27 頁

1988 年 3 月　「家族意識へのライフコース・アプローチ」,『社会学年誌』(29), 早稲田社会学会 , 91-101 頁

1989 年 3 月　「女性の就業パターンのコーホート間変化」,『紀要別冊第 16 集』, 早稲田大学大学院文学研究科 , 51-62 頁

1990 年 3 月　「中国家族研究への現状と課題―『核家族化』論をめぐって」,『人間発達資料集』(1), 早稲田大学人間総合研究センター , 1-22 頁

1994 年 3 月　「家族変動研究と家族類型―森岡清美の所説を手がかりにして」,『琉球大学法文学部紀要社会学篇』(36), 1-22 頁

1996 年 3 月　「沖縄における米軍基地就労経験者の職業経歴―ライフコース論の視点から」,『琉球大学法文学部紀要地域・社会科学系篇』(2), 49-75 頁

1996 年 3 月　「家族」,『北中城村史：民俗編』, 81-102 頁 , 北中城村役場編

1998 年 9 月　「職業キャリアにおける安定段階への移行タイミング―昭和期を生きた日本人男性の場合」,『人間科学』(2), 琉球大学法文学部人間科学科紀要 , 121-144 頁

2000 年 3 月　「沖縄の家族意識の構造・要因分析―都市的家族の場合」,『人間科学』(5), 琉球大学法文学部人間科学科紀要 , 75-105 頁

2002 年 3 月　「戦後の家族変化再考―配偶者選択、性別役割分業をめぐって」,『人間科学』(10), 琉球大学法文学部人間科学科紀要 , 97-110 頁

2004 年 1 月　「老親介護の構造―介護者としての子の視点から」, 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容 全国家族調査（NFRJ98）による計量分析』, 東京大学出版会 , 149-158 頁

2004 年 3 月　「The Changing Transition to Adulthood in Japan : Timing and Order of Events in the Life Course」,『人間科学』(14) , 琉球大学法文学部人間科学科紀要 , 227-249 頁

2006 年 3 月　「沖縄の都市家族における家事遂行とその要因分析」,『人間科学』(17), 琉球大学法文学部人間科学科紀要 , 271-287 頁

2007 年 3 月　「高齢者の人生浮沈評価へのライフコース・アプローチ―沖縄高齢者の家族との死別経験をめぐって」,『生きがい研究』(13), 長寿社会開発センター , 73-96 頁

2008 年 4 月　「現代日本社会におけるライフコースの標準化・制度化・個人化をめぐって」,『社会分析』(35), 日本社会分析学会 , 19-37 頁

2012 年 3 月　「沖縄における夫の家事参加―沖縄総合社会調査 2006 による分析」,『人間科学』(27), 琉球大学法文学部人間科学科紀要 , 205-218 頁

2013 年 9 月　「テーマ別研究動向（沖縄）」,『社会学評論』(64-2), 日本社会学会 , 294-305 頁

2014 年 3 月　「沖縄出身者の「本土」生活体験―U ターン者の意識調査から」, 人間科学（31), 琉球大学法文学部人間科学科紀要 , 11-31 頁

2016 年 8 月　「世代による戦争体験の違い」,『名護市史本編・３　名護・やんばるの沖縄戦』, 名護市史編さん委員会編 , 629-644 頁

2016 年 3 月　「特集　沖縄と社会学によせて」,『社会学評論』(67-4), 日本社会学会 , 365-367 頁

（その他）

1985 年 8 月　調査報告書「大垣外の歴史と人生」（分担執筆）, 早稲田大学社会学研究室

1988 年 4 月　調査報告書「中高年のライフチャンス―激動の時代を生きた世代 Part Ⅲ」（分担執筆）, 昭和 63 年 4 月 , 早稲田大学社会学研究室

1990 年 8 月　翻訳『家族時間と産業時間』（タマラ・ハレーブン著、分担翻訳）, 早稲田大学出版部

1990 年 7 月　書評「アメリカの家族 1960-1990（ジョージ・マズニック、メアリー・ジョー・ベイン著）」,『家族社会学研究』(2), 日本家族社会学会 , 107-109 頁

1995 年 7 月　「沖縄におけるライフコースのコーホート間比較調査―中間報告」, 文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書

1999 年 3 月　調査報告書『介護と親族ネットワークに関する調査報告書』（分担執筆）, 財団法人長寿社会開発センター

2000 年 3 月　「沖縄におけるライフコースの出生コーホート比較研究」, 文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書

2000 年 3 月　「与那国暹教授の人と業績」,『人間科学』(5), 琉球大学法文学部人間科学科紀要 , 1-3 頁

2001 年 3 月　文献紹介「講座社会学２　家族（目黒依子・渡辺秀樹編）」,『家族社会学研究』(12-2), 172 頁

2002 年 2 月　講演「家族に今何が起こっているか―現代家族の状況」, 沖縄県女性総合センター「てぃるる」平成 13 年度女性学講座 , 2002 年 2 月 7 日

2002 年 3 月　基調講演「21 世紀の家族像」, 沖縄県北谷町主催 , 男女共同参画フォーラム in ちゃたん , 2002 年 3 月 9 日

2003 年 3 月　「職業キャリアの展開と家族」, 松田（熊谷）苑子編『全国調査「戦後日本の家族の歩み」（NFRJ-S01）』, 日本家族社会学会 全国家族調査委員会 , 47-64 頁

2004 年 7 月　「研究動向―ハワイ東西センターおよびハワイ大学における家族研究の動向」,『家族社会学研究』(16-1), 日本家族社会学会 , 94-100 頁

2005 年 5 月　「家族形成期における既婚女性の就業キャリア」, 熊谷 苑子 , 大久保 孝治編『コーホート比較による戦後日本の家族変動の研究 : 全国調査「戦後日本の家族の歩み」(NFRJ-S01) 報告書 No.2』, 日本家族社会学会 全国家族調査委員会 , 31-44 頁

2005 年 3 月　平成 16 年度大学教育研究重点化経費報告書「沖縄の都市家族における家事遂行とその要因分析」,『戦後 60 年沖縄社会の構造変動と生活世界』, 琉球大学法文学部人間科学科社会学専攻 , 11-48 頁

2005 年 3 月　「特集　沖縄社会とディアスポラ : まえがき」,『移民研究』(1), 琉球大学移民研究センター , 7-10 頁

2006 年 3 月　「沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン―新たな出会いとつながりをめざして」,『移民研究』(2), 琉球大学移民研究センター , 81-83 頁

2006 年 12 月　現場レポート「沖縄の日系人、定住外国人、アメラジアン」,『西日本社会学会年報』(5), 西日本社会学会 , 163-168 頁

2006 年 6 月　講演「職業キャリアの展開と女性のライフコース」, 沖縄県女性総合センター「てぃるる」平成 18 年度女性学講座 , 2002 年 6 月 15 日

2007 年 4 月　書評「落合恵美子(編著)『徳川日本のライフコース』,『家族社会学研究』(19-1), 70-71 頁

2008 年 3 月　『沖縄の社会構造と生活世界―二次利用として公開可能なミクロデータの構築をめざして』(分担執筆), 科学研究費補助金研究成果報告書

2009 年 3 月　『平成 17 年度～平成 19 年度沖縄総合社会調査 2006、第二次報告書』(共編), 沖縄総合社会調査 2006 委員会

2010 年 3 月　書評「新版・ライフヒストリーを学ぶ人のために(谷富夫編)」,『西日本社会学会年報』(8), 西日本社会学会 , 125-126 頁

2012 年 9 月　「『沖縄的なるもの』の現在」(共著),『社会と調査』(9), 一般財団法人社会調査協会 , 70-75 頁

2012 年 12 月　「復帰 40 年時の標 31　家族(上・下)」, 沖縄タイムス 2012 年 12 月 19 日～ 20 日

2013 年 3 月　書評「生活農業論(徳野貞雄著),『西日本社会学会年報』(11), 西日本社会学会 , 101-102 頁

2014 年 4 月　書評「里親制度の社会学(園井ゆり著),『月刊福祉 4 月号』, 全国社会福祉協議会 , 95 頁

2014 年 10 月　文献紹介「ライフコース研究の技法(グレン・H. エルダー ,Jr./ジャネット・Z. ジール編著)」,『家族社会学研究』(26-2), 日本家族社会学会 , 190 頁

2015 年 3 月　「復帰後 40 年間の生活世界に関する沖縄アイデンティティの変容―社会学の視点から」, 財部盛久編『沖縄における社会不安に関する継続的研究』, 平成 24 年度琉球大学中期計画達成プロジェクト戦略的研究推進経費 , 97-103 頁

2015 年 5 月　書評「現場の奄美文化論−沖縄から向かう奄美(津波高志著)」琉球新報朝刊 2015 年 5 月 3 日

2017 年 4 月　書評「歴史認識と民主主義深化の社会学(庄司興吉編著)」琉球新報朝刊 2017 年 4 月 16 日

2018 年 11 月　基調講演「現代社会における脱家族化とその帰結」, 第 55 回九州医療ソーシャルワーカー研修会おきなわ大会

＜外　部　資　金　等＞

1994 年　沖縄における人生の出来事経験の発達的・歴史的変化についての研究 (奨励(A) 06851029), 研究代表者

1997 年　女性の労働力参加のコーホート・フロー分析 (重点領域 09206113), 研究分担者

1997-1998 年　沖縄におけるライフコースの出生コーホート間比較研究（基盤(C) 09610188）, 研究代表者

1998 年　女性の労働力参加のコーホート・フロー分析（特定領域(A) 10113111）, 研究分担者

2002 年　コーホート比較による戦後日本の家族変動の研究（基盤(A) 13301010）, 研究分担者

2003 年　沖縄におけるディアスポラのライフコース - ホスト社会との関係性をめぐって -（基盤(C) 13610211）, 研究代表者

2005-2007 年　沖縄の社会構造と生活世界 - 二次利用として公開可能なミクロデータの構築をめざして -（基盤(B) 17330118）, 研究分担者

2005-2007 年　沖縄の大学・社会教育における拡張的ジェンダーパースペクティブ実践での認識変容研究（基盤(C) 17510221）, 研究分担者

2007-2009 年　那覇都市圏の過剰都市化に関する社会学的研究（基盤(B) 19330108）, 研究分担者

2008 年　沖縄の本土Ｕターン経験者のライフコースと親子関係についての調査研究 , 平成 20 年度公益信託宇流麻学術研究助成基金 , 申請代表者

2018-2022 年　沖縄戦死別経験者のライフコースと家族キャリアに関する研究（基盤(C) 18K02031）, 研究代表者